

Libra I on

vol.21

<http://www.libra-sc.jp>

りぶらいおん

特集：

りぶらフォーラム2011 開催報告



● りぶらサポーター紹介 山田美代子



図書館交流プラザ(愛称:Libra)は、「図書館」「活動支援」「文化創造」「交流」の4つの機能で構成されています。りぶらサポータークラブ(LSC)は、Libraの施設活用をサポートする活動をしています。





りぶらフォーラム 2011

「りぶらを語ろう」 2012.2.26

2月26日(日)に、りぶらサポータークラブの主催で「りぶらを語ろう」をテーマにフォーラムが開催されました。会場のりぶらホールでは、第一部で米津眞氏(岡崎市図書館交流プラザ総合館長)、野田元陽氏(岡崎市中央図書館長)、神尾典彦氏(岡崎市文化活動推進課長)を迎え、りぶらに対する思いをお話しいただきました。りぶらを活用した協働事業「親子でトモ学」の浅沼康子さんからは活動報告を、津田昌利さんには「こなりぶらになったらいいな」の作文を、それぞれ発表していただきました。また第二部では、参加者を交えたパネルディスカッションが行われました。

米津 眞氏のお話

本日は「りぶらを語る」ということですが、民間団体であるりぶらサポータークラブさんが、こういったフォーラムを開催されるということ自体が、りぶらの将来性と可能性が大いにあるということを示唆していると思います。

りぶらは開館以来、大変大勢の方にご利用いただいております。毎日の散歩のコースにりぶらを入れて新聞や雑誌を読んで帰るとか、下校途中の高校生が友だちとお喋りをしたり、勉強をしたりして帰って行く。また、若いお母さん方もお子さんを連れてよく来られます。若い人が楽器を肩に、何人か歩いていくのもよく目にする光景です。これは、りぶらが「図書館」だけではなく、「活動支援」「文化創造」「交流」という、4つの機能を持っているということに大きく起因すると思います。

人が集まって活動する場では、出会いがあり発見があり、これまで経験していないことに足を踏み入れる機会があるのかなと思います。活動の場が広がるということは非常に有意義なことで、視野が

広がり交友関係が広がり、新たな生き甲斐ができるなど多くの利点があります。人との関わりが始まるということは、生活が活性化していくことだと思います。

このような機会には、偶然を待つだけではなく手助けが必要です。りぶらはその機能を充分持っていると思います。りぶらで活動する団体やその催し、あるいは市が主催する講座やりぶらまつりなどは、まさにそれを目的とした事業です。

また、団体活動の運営には「ヒト、モノ、カネ」をどのように確保するか、あるいは活動のマンネリ化などの問題も生じます。しかし、りぶらにはその手助けする機能も備わっています。ノウハウを得るための本が十分にあり、活動に使う部屋やチラシや資料を作成するための印刷機器もあります。何より、運営に関する相談ができる窓口があります。

自分の想いを形にして行くことは困難な面もありますが、基本的には楽しいことです。団体活動の中で失敗と成功を経験しながら、団体としての想いを実現させていくことで運営能力が培われていく

と思います。こうした能力の獲得は、社会を構成する個人としての成長に他なりません。同じ問題意識を持った人たちが集まって学習し、解決方法を考え他の人たちの賛同を得て実行して行く。つまり、自分たちの街は自分たちで住みよくしていくという、住民自治の考えにつながっていくのではないのでしょうか。

りぶらは、そういう活動ができる成熟した市民を育てる場所、また活動の拠り所になるのではないかと考えています。りぶらに集う多くの皆さん一人ひとりがりぶらで成長し、そうした方々によって岡崎市がますます住みよい場所になっていく。りぶらはそんな岡崎市の中心になってほしいと考えています。



野田元陽氏のお話

私は、丁度このりぶらが計画される段階から完成まで財政課で予算の査定をしていました。初めてりぶらに来たときに大変多くの方がいて、図書館にこんなに人がいるものかと驚きました。図書館というのは、基本的には調べものをする所だというイメージが大きかったからです。

戦前の図書館は「図書館令」という法律に準じて運営されていました。そのときの図書館は「閲覧をする場所」でした。

それが戦後になって「図書館法」に変わり、閲覧だけではなく貸出しも認められるようになりました。しかし、戦後しばらくはほとんど館外貸出しはされていません。

昭和45年、図書館協議会が「市民の図書館」という本を出し、それが一つの転換期になりました。この中には三つの大きな目標が書かれていました。①貸出しの重視、②児童サービスの充実、③全

域サービスです。これを目標に公立図書館は方向性を持って運営されてきました。

平成20年11月に、図書館交流プラザ内に図書館が移転すると、利用者が非常に増えました。その理由には、施設が新しくなったことと駐車場が広がったこと、それから蔵書が増え開館時間が長くなったことも挙げられます。そして、やはり施設としての魅力でしょうか。計画時から市民の皆さんとワークショップ

の中で作り上げてきたということも、非常に大きいのではないかと思います。

オープニング効果もあってか、21年の利用者は増えましたが、22年と23年は減っています。やはり図書館は、皆さんに利用してもらわないと存在価値がありません。元々利用している方はよいのですが、利用していない方にどうやって来ていただくか、利用していただくかが問題です。キーワードは「子ども」だと思っています。

先日芥川賞を受賞した田中慎弥さんが『週刊文春』の中で、枕元でのお母さんの読み聞かせが自分の作家の原点だ、と言っていました。この家庭内の「読み聞かせ」というのが非常に大切なことだと、私は改めて思いました。

図書館でも読み聞かせを行っています。平成14年に「子ども読書活動の推

進に関する法律」が制定され、子ども読書活動を勧めようとボランティアさんの協力を得て読み聞かせを始めました。図書館以外でも、岡崎市の小中学校ではボランティアの方に読み聞かせをしています。これは非常に重要なことだと思っています。全ての小中学校でやってもらっていますので、原則全員、小学校1年生から中学校3年生までの9年間、ずっと読み聞かせをしてもらっているのです。これは非常に効果が大きいだろうと思います。

読み聞かせというのは、二つの効果があるとされています。一つは、本を好きになり、本を読むきっかけづくりになる。もう一つは、人の話を集中して聞く訓練になるということです。小さいころに読み聞かせを受けることで本が好きになり、自分で本を読めるようになり

す。学校だけではなく、お子さんがいる方にはお子さんに、お孫さんがいる方にはお孫さんに、積極的に読み聞かせをしてあげてほしいですね。

家庭内での読み聞かせが一般的になれば、皆が本を好きになり、図書館の利用者も増えるのではないかなと思います。また、図書館に来ればりぶらサポータークラブの活動が分かります。そうして、市民活動や市民協働にも興味を持ってもらえたらいいなと思っています。



神尾典彦氏のお話

18年度からりぶらの拠点整備準備室に入り、22年度は一旦外に出ましたが、また今回、文化活動推進の課長として戻ってきました。今回は、りぶら建設当初の思いを簡潔に述べたいと思います。

まず1点目です。この康生町というのは、中心市街地・繁華街として一種独特の賑わいがありました。ところがバブル以降中心市街地の衰退が進み、もう一度賑わいを戻そうと12年に「中心市街地活性化基本計画」を作りました。そして15年度に「拠点整備基本計画」でりぶらの原型が定められ、図書館を核とする生涯学習施設を、集客施設として建設することになりました。

昨年末には来館者が500万人に達し、本当に人を集める施設にはなったのですが、近くの松坂屋やセルビも閉店し、賑わいのある康生ではなくなりました。そういう意味で、りぶらが中心になって康生全体が賑わってほしいという



思いがあることを知ってもらいたいと思います。

2点目は、施設の性格・目標です。18年度には管理運営計画を、市民参加で検討しました。そして「集い」「魅力」「協働」「情報」「学習」という、5つの拠点になることを目指しています。「集い」については、多様な活動や図書館利用者の拡大という意味で、大分達成しております。それから「魅力」については、文化の拠点として「ジャズ」「むかし館」という2つの展示室を設けております。特にジャズについては、単にミュージシャンを呼ぶだけではなく、「ビーンズ」という子どもたちのジャズオーケストラを作り、育てるということも大切にして魅力を高めたいと考えています。

それから「協働」です。市民と行政、あるいは市民と市民が協働していくということです。これもサポータークラブさんの活躍で分かりますように、ある程度は進んでいるかと思っています。それから「情報」の拠点。皆さんが欲する情報というのはそれぞれ違いますので、集める情報あるいは発信する情報、その取捨選択を責任を持ってやっていく必要があると思います。

それから「学習」の拠点。生涯学習の拠点として動いてきています。市民センターでの定期講座を開催したり、お試し

講座や市民講師ということで、新たに講師になる方を育てようという動きも出ています。18年度に定められた計画ですので、方向性は変わってきたかもしれませんが、まだまだ発展する余地のある5つの目標だと思います。

3点目として、りぶらの運営に関して、管理よりも運営を大切にしたいと思います。色々な思いがあるでしょうが、りぶら図書館交流プラザに、どのような魅力を発見するかというのは、やはり人それぞれ違うと思います。

近江商人の言葉に「三方よし」という言葉があります。売る方は儲けられればよいし、買う方もよりいい物が買えた喜び。さらに周りの人がそれはよかったねといえるような商売のことです。市民活動などでも行政の目的だけに沿って動いてくれる人を大事にしたり、市民の方も自分たちの言い分だけを通すというように、行政とりぶらを利用する方たちだけが気持ちよいのではなく、周りから見ても「あれは面白いね」「自分たちも関わってみようか」と思え、多数の方が喜べる「三方よし」なりぶらの運営になるとよいと思います。ですから運営を弾力化して、それぞれ思いの違う皆さんの中で第三者的な目でも評価できるような施設になれば、りぶらがいっそう発展していくのではないかと考えています。

りぶらフォーラム 2011 「りぶらを語ろう」

「りぶらを活用」協働事業報告

23年度「りぶらを活用」協働事業報告

親子でトモ学「詩と色えんぴつをたのしもう!!」

発表：浅沼康子

事業の目的

学びの入り口に立つ年齢の子どもと、その親を対象に、

- 1) 図書館利用への意識を高める場所を提供する。
- 2) 詩を素材として、親子で「ともに学ぶこと」への関心を深める足がかりを作る。
- 3) 親子間のパートナーシップを深める一助とする。

活動実績

第1回	8月27日	親子で詩を音読し、その作品からヒントを得て、色鉛筆を使っての描画を通し、親子でトモ学の楽しさを知る活動を行なった。
第2回	9月10日	様々な詩の音読を試み、色鉛筆を使って親子で異なる視点から描くことで、親子でトモ学のおもしろさを味わう活動とした。
第3回	10月1日	
第4回	10月15日	りぶらまつりのため、親子で展示作品や発表の準備をした。
第5回	10月29日	
第6回	11月12日	りぶらまつりに参加し、発表や展示を行うことで、親子でトモ学を体感するとともに、当日参加者に、当プロジェクトを知ってもらう場を提供した。

事業の成果

- ① 「親子でトモ学」の目的に沿う場を提供することができた。
- ② 担当スタッフとボランティアが、プロジェクトの目的を共有し、工夫と協力をするなかで、多くの経験とスキルを得た。
- ③ LSCのサポートや、他の市民活動団体とのコラボレーションという形で、市民協働の意図するところを少なからず体現できた。



平成24年度の展開

親子でトモ学への理解を深め、その輪が広がるよう努める。そのために、より多くの親子が参加できるように、日程や託児等の設定に配慮し、より精度の高いプログラムの提供をしたい。

こんなりぶらになったらいいな！

発表：津田昌利

50年後の新聞報道から、りぶらの未来の姿を語っていただきました。



日本ワールドニュース新聞より
月刊ワールドニュース3月号記事

2063年3月、愛知県岡崎市の図書館交流プラザ『りぶら』が、建替え工事を終えて新築オープンしました。平成時代に建てられた、図書館を中心とした施設が拡大されたばかりではなく、旧『りぶら』の3倍近い敷地を確保して東館と西館に分かれています。

西館は伊賀川を地下としているため、日本でも唯一、地下に自然の河川敷公園がある施設である。地下フロアー、1階フロアー、2階フロアーと、3つのフロアーが吹き抜けになっており、ゆるやかな坂道や階段で続いているため、散歩コースとしても楽しめる。

西館3階には、多目的ホールがあり、主にコンサートなどに利用しやすく音響設備が整っている。そして4階は、世界でも唯一とされるコスミックプラネタリウムになっている。今までのように地球から宇宙を観る天体ではなく、宇宙から地球や宇宙の各方向を観ることが出来るドームである。複数の人工衛星から送られてくる映像を、リアルタイムで観ることができる。

オープニングセレモニーに招かれた、アメリカ、イギリス、中国等々40カ国以上の各代表からは絶賛された。特に人工衛星からの映像は、軍事的国家機密として扱われてきたことなどから、純粋な平和利用としての価値が高く評価されたようである。

東館は、1階がインフォメーションホールなど旧『りぶら』の施設を近代化して整備、2階も同様、図書室や自習室・会議室などを揃えている。新しい『りぶら』のもうひとつの見所は、各階所々に設置されている望遠鏡と、屋上に建てられた電波塔である。電波塔は地上800メートルと日本一の高さを誇り、この電波塔の先端に、視野360度・距離100キロメートルの範囲まで確認できる高性能カメラが設置されている。館内に設置されている複数の望遠鏡からリモートコントロールされることにより、1台のカメラから複数の異なった映像をリアルタイムで観ることが可能な、世界初の技術が投入されている。

地方都市でありながら、世界の最先端技術をさり気なく市民の憩いの場に取り入れた、新しい「りぶら」は岡崎市の名を世界に印象つけたようである。

すでに国内はもとより、海外からの見学申込や、観光ルート組み入れによる予約が1年以上先まで満たされているという。その経済効果は日本のGDP数%に及ぶとさえ囁かれているようである。

りぶらフォーラム 2011 「りぶらを語ろう」

パネルディスカッション (抜粋)

司会 (杉浦) : 第二部は、私と戸松啓二氏の二人のコーディネートで、参加者を変えたパネルディスカッションを行います。特にテーマを決めておりません。皆さんから出たテーマについてお話を進めて行きたいと思っております。

司会 (戸松) : ではまず始めに、ルールをいくつか決めておきたいと思えます。まずは「聞く自由」です。何を聞いていただいても結構です。もうひとつは「話す自由」です。好きなことを話していただいて結構です。そしてもうひとつが「答えられない自由」です。では、この三つの自由を念頭に、皆さんからいただいた質問をもとに流れを作っていきます。



発言者 A : 昨年図書館で「80冊本を読もう」というキャンペーンをやっていたね。その後、しりきれとんぼになっているなと思います。やはりちゃんと報告するというのが大事かと思えます。活字離れが進んでいると聞きますが、やはり本を読むキャンペーンなどがあれば、私も読もうかということになるかと思えます。私事ですが、りぶらができてからの3年間でこの本を1千冊読みました。記録も取っております。

発言者 B : 私も1年以上かけて80冊到達したんですけども、提出はしておりません。「こんな本読んだんだ」というのを記録をすることが大切だなと感じたので、提出するまでもないことだなと思えました。行が読んだ本のタイトルで埋まって行くのが楽しくて、それがうれしい発見でした。

戸松え : 事務局の戸松恵美です。岡崎図



書館未来企画という事業の中で、平成22年度に「読書マラソン」シートを配布しました。ちょうど国際読書年でしたので、それに絡めて本を読んでいただく一助にとシートを作成し、一年間で2,500枚を印刷して配布しました。完走した方500人には粗品を差し上げました。シートは個人情報なので記録は取っておりません。個人の記録として活用していただきました。もっと利用したいということであれば、今後検討させていただきます。

司会 (戸松) : 続いて「りぶらでお喋りする場所があったらいいな」の提案をされたのはどなたですか。

発言者 C : 私はリタイアして13年になります。午前中に総合公園でテニスをして、午後にはここに寄ることになっています。図書館というのはどちらかという本を読む場所です。それは理解できるのですが、玄関ですれ違っても誰とも話することなく、本を見て借りて家へ帰って行く。これでは少し寂しいなと思うのです。たくさんのボランティアの方がみえるということを知りました。その方を中心にして、何でもよいからお喋りをして交流ができれば、違った楽しみ方ができるのかなと思います。

発言者 D : 私ボランティアをしていますが、人と会ったときにはまず挨拶をします。できれば笑顔浮かべながら、と心がけています。朝近所を歩くときには、道で会った人にも必ず挨拶しています。女性は気軽に挨拶をしてくれます。男性や初めての人は、一瞬戸惑うような感じですね。その後徐々に挨拶を返してくれ

るようになります。子どもは自発的にしてくれます。

ボランティア活動を終えたときに、私は自分が少し優しくなったような気がします。そういう感想をかなりたくさんの方が述べています。ボランティアの在り方はいろいろあると思いますが、いわゆる喜びというのは、ひとつはそういったところにあるんじゃないかと思えます。笑顔を浮かべて挨拶をするだけ。それを繰り返していれば、いろいろな人にそれが伝播していく。それをこのりぶらの中に適用したらどうでしょう。

司会 (戸松) : ありがとうございます。「りぶらで挨拶運動」的なものですね。

山田 : りぶらサポータークラブ代表の山田です。私も常々、りぶらの中で活動していて、第一部の中で神尾さんがおっしゃられたように、「読む」それから「習う」「勉強する」というような機能は備わっているんですが、やはり「過ごす」という機能があってもいいかなと思います。利用者同士でちょっとした交流ができるようになると更によいかかと。老化防止には、ちょっと緊張しながらでも知らない方とお話する、ということが非常によいそうですから。



発言者 E : 私の住む地域では「笑顔の輪を広げよう」を町内の合い言葉にしています。笑顔の輪が広がると、次はニコッと笑って「おはようございます」とか「よいお天気ですね」と言うんですけど、次にお会いしたときには会話が出来るんですね。先程の方のように、りぶらにそういうことがあったらもっと嬉しいなと思えました。

司会：ちなみに、同じことを感じたりする人はいますか？

発言者 F：私もそうですけども、知らない人とお話するきっかけが作りたいという人、非常に多いと思うんです。スタッフの皆さんでりぶらの挨拶運動を始めて、りぶらの至る所で「ありがとうございました」とか「こんにちは」とか、まずはそれをおやりになったらいいかでしょうか？

米津：いいんじゃないですか？ どんどん始めちゃいましょう。

司会（戸松）：ありがとうございます。次は、プレイルームの件ですね。

早川：職員の早川と申します。りぶらには「交流」部分に当てられている場所がいくつかあります。お堀通りの交流スペースと、外にある読書広場と北側の入り口の芝生広場、それからストリート広場です。ほとんど外の空間ですが「タイガーカフェ」も交流の場になっています。あともうひとつ、プレイルームも交流の場ということで位置づけられています。

実は、プレイルームが託児中で使えないという指摘があります。小さいお子様と保護者の方が一緒に遊んだり休憩できる部屋なのですが、それが託児中ということで使えないことがあるので、それをどう解決するかということも考えなくてはいけないと思います。

市民協働ということで、市の職員だけではフォローできないところを、市民ボランティアの皆さんの力をいただきながら、今後一緒に考えていけたらと思います。交流の場所がないわけではないんです。それを動かす人と知恵を出し合っていけたらと思います。



発言者 G：「りぶらっこファミリー」の活動をしています。月曜日と金曜日の午前中、りぶらを利用されるお母さんたちにちょっと時間をあげようということで、プレイルームで託児をしています。だいぶ活動が認知されてきて、「月曜と金曜はプレイルームは使えないよね」ということが周知されてきています。プレイルーム以外で託児ができるというのですが。

戸松え：講座の主催者からすると、会場を2つ借りた上に託児の費用まで出さなければいけなくなります。例えば図書館のお話の部屋を託児室として使えないかなと簡単に考えてしまうのですが、図書館の中で託児をするということは他の利用者の方に迷惑がかかるということもあるので、その辺をお試して何ヶ月かやってみるとか、どうなんでしょうか。

野田：子ども図書室の奥に読み聞かせの部屋があります。あそこがもし空いていれば使ってもいいのかな、と個人的には思います。ただ、やはり施設を使ってみる方に何かあったときに「何かあったら行政の責任だろう」といわれる立場からすると、あってはいけないことが起こると、やっぱり行政が責任を取らなければいけませんので、行政マンとしては難しいところなんです。個人的には、空いているんだから使わせてくれと言われたときに、空いてるんだから使ってもいいと思いますが、個人と行政マンとしての判断の境目が難しいなと思います。

司会（戸松）：勇気ある発言をありがとうございます。日本の行政の方は大変気の毒だなと実は思います。欧米ではもっと自由活発に色んな意見を言いやすいですね。その辺もりぶらでは少し自由になるといいなという風に思います。多分りぶらサポータークラブでは、市民協働と

してどのように協力ができるかということにいくのではないかと思います。

では次に「年間150万人以上の集客があるにも関わらず、中心市街地が沈落してしまいました。この理由は何だろうか？」ですね。

発言者 G：中心市街地でない、僻地に住んでいる岡崎市民のための活性化というのも、一緒に考えてほしいです。市街地の話をするときには、田舎の話も是非一緒に。

司会（杉浦）：その気持ち、とてもよく分かります。りぶらサポータークラブで、中心市街地に住んでいる人は少ないんです。りぶらの活性化、中心市街地の活性化に日頃努めているんですが、住んでいるのは郊外なんです。だから本音を言うと「中心市街地の人たちもっと頑張つてよ」と思っています。

発言者 H：中心市街地に人を集められることが、やはりりぶらの大きな魅力だと思います。その点ではりぶらのホールで映画をやっているのもいいですね。他には、ワールドカルチャーの講師は名古屋国際センターからみえていそうです。できるだけ大きな催しをやれば、近くの人でも遠くの人でも足を運ぶのではないのでしょうか。私は幸田の公民館にも行きます。安城の公民館、それから歴史博物館などにも。だからこの岡崎でも、色々なイベントを開催するというのが大切かなと思います。これは本を読むことよりも人を集めるということですね。

発言者 I：りぶらでなければできないことに注目して「やっぱりりぶらに行かなきゃね」というものができる、この町の核になれるのではないかと思います。メインはやはり文化だと思います。文化の発信地として岡崎の中心だったらいいな。他の所と違うものを見いだしていけたらいいのではないかなと思います。



司会(戸松):りぶらの広報活動、インフォメーションの仕方について、ご意見のある方は。

発言者J:りぶらで活動している方はいろいろご存じでしょうけど、一般市民は知らないことの方が多いと思います。りぶらはとてもよいシステムを持っているしよい特徴があるのに、一般の方たちがそれを知らないのはもったいない。他の施設と違うところをもっとアピールして、こういう風に使える、こんなことをやっているというインフォメーションを工夫してはどうかと思います。

戸松え:りぶらとしての広報物は出ていないのが現状です。とりあえずその役割を担っているのが「Libra | on」というサポータークラブで発行している情報誌です。それで充分だとは思っていないので、内容についてご意見があればお寄せ

いただきたいと思います。

司会(杉浦):こういう形式でのフォーラムは初めての取り組みでしたが、参加していただいた皆様のこの場に対する敬意によって、円滑に進行することができました。いただいたご意見につきましては、これでお終いということではなく、りぶらサポータークラブと行政の方、他の市民の方との協働で、一つひとつ解決していきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。



【参加者の感想】

最初の3人のお話は、こんな風にりぶらを考えているんだなと改めて知ることができた。協働事業の事例発表は本当に分かりやすかったので、広報にも利用しては。ディスカッションは本当に多くの意見が出ておどろきました。

もっともっとワイワイガヤガヤと「会話」ができるようになってほしいと思います。今日のフォーラムはとても満足していますが、改善の余地もたくさんありそうですね。ガンバレ、みんな!!ガンバレ、自分!

何かとても面白くて有意義な集まりだったような気がします。今日、全くふれられなかった「マルチメディア」もしくは「IT」が、図書館もしくはりぶらに与えるインパクトについての視点を忘れずに、りぶらの今後を考えていかなばと思います。



私の一冊 vol.16

『ノルウェイの森』 村上春樹:著 講談社

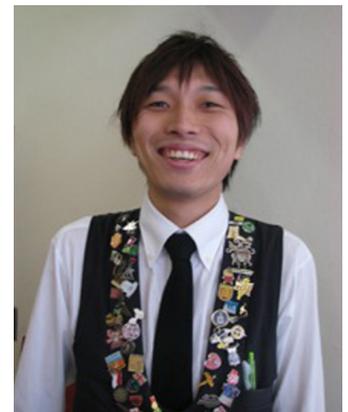


今回私が紹介する一冊は、村上春樹著の『ノルウェイの森』です。最近では映画化もされ、著者の新作『1Q84』が話題を呼んだこともあり、皆様もすでに承知の作品かも知れませんね。『海辺のカフカ』や先ほど紹介した『1Q84』の中に存在する、メタファーやメタファー的な要素のない、よりリアリティー(少しアブノーマルな世界ですが)を感じる作品がこの『ノルウェイの森』です。

当時の私がこれを読んで深く感じたのは、物語全体に広がる「美しさ」と、読み終わった後に感じた何ともいえない余韻の残る、もやもとした満足感です。この物語は恋愛小説として読まれることが多いと思いますが、それにしては登場人物の「死」の多い作品ですし、恋愛小説特有の綺麗さもなく、表現としてはひどく官能的で人間味の強い、人間臭さのある作品だと感じました。主人公の人生の一部を細かく表現しているこの作品は、起承転結のあるものとは違い、ちょっとした言動に影響される心情であったり、気持ちや行動をより深く表現しており、その描写が切ないほど哀しく、美しいほど儂く感じます。

読者によって感じる幅が大きいこの作品を、ふと母親に紹介した際に私が驚いたのは、母が20年程前に既にこの本を読んでいたことです。当時20代前半だった頃の母の感想を聞いた私は、同じ年の母親と話をしているみたいで新鮮で、少し変(?)な気分を味わいました。官能的な表現が少し恥かしかったこと、本の内容が暗く気分が沈んだことなど、「ああ、母親にも自分のような年齢の時

があっただのだ」と改めて感じた瞬間でした。20年前の母親に出会えたことは、嬉しくも恥ずかしかった思い出でした。この本は、読者によって切ない物語であったり、とても痛々しい物語であったり、様々な感情を抱かせてくれる作品だと思います。一度手にとっていただき、身近な方と気持ちを共有してみてください。普段とは違う一面が見れて、素敵な思い出ができるかもしれません。



尾関 佑介(おげき ゆうすけ)

図書館交流プラザ内タイガーカフェにてホールスタッフとして勤務。より多くのお客様に満足いただけるようなサービスを目指しています。図書館にカフェ。少し変わった組み合わせですが、カフェで過ごす読書タイムも素敵だと思います。この仕事と環境を生かして、いろいろな方と交流ができるのも魅力的です。ご来店いただいた際には気軽に声をかけてくださいね。

があっただのだ」と改めて感じた瞬間でした。20年前の母親に出会えたことは、嬉しくも恥ずかしかった思い出でした。

この本は、読者によって切ない物語であったり、とても痛々しい物語であったり、様々な感情を抱かせてくれる作品だと思います。一度手にとっていただき、身近な方と気持ちを共有してみてください。普段とは違う一面が見れて、素敵な思い出ができるかもしれません。



りぶら中央図書館情報

“県図書館で借りて→岡崎で返す” 4月から本実施 愛知県図書館 遠隔地返却制度

昨年度、9月～3月の期間限定で試行していました愛知県図書館の遠隔地返却制度が、平成24年4月から本実施になりました。施行期間中、当制度を利用して県図書館へ返却した書籍は184点。当館で返却された資料は、週一回の定期便で県図書館に送られます。最近では毎週のように当制度を利用して返却される資料があり、少しずつ制度が浸透している感じがします。また、返却できる資料は書籍の他に、AV資料(CD、DVD、VHSビデオなど)や紙芝居(長辺が45cm未満)も受付可能です。遠隔地返却制度は県図書館の実施する制度で、県図書館まで行くことに時間や交通費が特に多くかかる地域を対象に実施しています。岡崎市在住の方なら当制度を利用して、当館から県図書館へ資料返却ができますので是非ご利用ください。詳細は県図書館、館内掲示ポスター、1階レファレンスカウンターで配布しているチラシをご覧ください。

☆ご注意☆

- ・愛知県図書館所蔵資料が対象です。 ・返却ポストや地域図書室では返却受付できません。
- ・当館で受け付けできるのは、岡崎市在住の方に限ります。
- ・受付は岡崎市立中央図書館「1階レファレンスライブラリー 貸出・返却カウンター」です。



レファレンス事例集

当館では「家康文庫」として徳川家康に関連する資料を収集して紹介しています。そのため、時には県外の図書館から家康に関連するレファレンスを受けることもあります。

質問	徳川家康の遺訓といわれる「人の一生は、重荷を負うて～及ばざるは過ぎたるより勝れり」の全文と意味(現代語訳)が知りたい。
回答	以下の2点を紹介しました。 ■『おかざき 小学校編3・4年 平成22・23年度版 下』岡崎市教育委員会 / 編 (A0233/オ) ■『徳川家康の言葉』杉田幸三 / 著 (A289/ト)
プロセス	キーワード「家康遺訓」でOPAC検索。いくつか検索された資料を見ましたが、全文の掲載があっても、それをわかりやすく読み下して対訳形式で紹介している資料が中々見つかりません。検索された資料の近くの棚を探すと、『徳川家康の言葉』があり全文と現代語訳が載っていました。
参考資料	徳川家康遺訓や名言に関する資料にこんなものがありました。 ・『教訓・家訓大辞典 第1巻』(O31.2/キ/1) ・『徳川家康金言・警句集』原麻紀夫 / 著 (A289/ト) ・『徳川家康遺訓集 附家康の履歴書』作者 (A210/ト) ・『徳川家康名言集』山岡荘八 / 著 (159/ト) ・『名言の内側』木村尚三郎 ほか / 著 (159/メ)

りぶら映像アーカイブス

紹介映像⑩

「通水70周年を迎えて～岡崎市水道局の歩み」
放送年：平成15年(2003年)

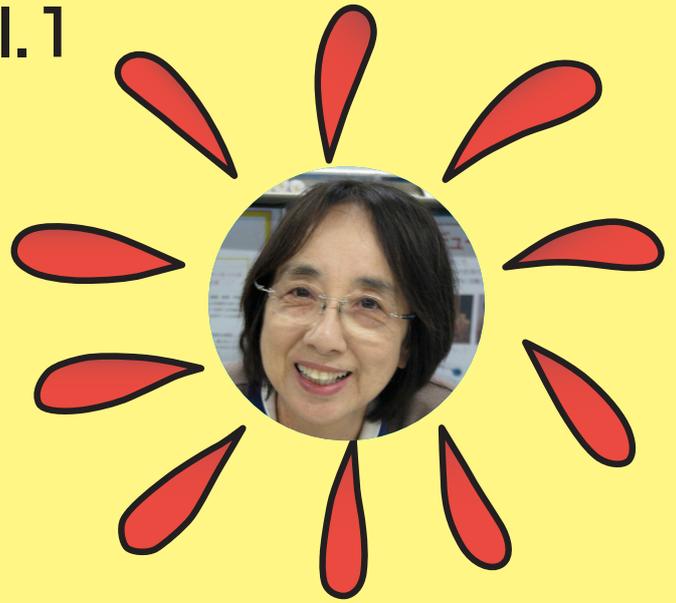


岡崎市の上水道は、1933(昭和8)年9月1日にスタートしました。その70周年を記念して制作されたこの番組では、岡崎の水道の歴史、そして実際に水道水ができるまでをわかりやすく紹介しています。なかでも六供町にある浄水場は、完成以来変わらない円筒形のシンボリックな概観の配水塔や、スタンドグラスをはめ込んだモダンな内装のポンプ室がとても印象的です。平成23年度末をもって、浄水場としての役割は終えましたが、配水場として引き続き活用されています。水道局では、水の情報誌「しずく」を発行し、岡崎の水道に関するさまざまな情報をお伝えしています。りぶらにも置いてありますので、ぜひご覧ください。
岡崎市水道局情報誌「しずく」サイト
<http://www.city.okazaki.aichi.jp/item15367.html#itemid15367>

りぶらサポーター紹介 vol.1

りぶらサポータークラブ代表 山田美代子

りぶらサポータークラブの運営委員を順次紹介していきます。第1回目は、サポータークラブ代表の山田美代子さんです。新しい図書館の構想段階から、市民の立場でりぶらの活用方法を考えてこれ、現在もりぶらで活動している様々なボランティアグループをつないで、多くの市民がりぶらを楽しく利用できるように活動しています。



LSC 以前のボランティア活動は？

28年前、子どもの通っていた竜美丘小学校での読み聞かせがボランティア活動の始まりです。子どもの忘れ物を届けに小学校に行ったとき、授業前の子どもたちの落ち着きのない騒がしい様子を見て、こんな時に本を読んであげたら、と思ったのが最初のきっかけです。有志の保護者の方と一緒に、とても懐の深い校長先生の理解の元、読み聞かせボランティアを始めました。

その後、子どもの成長とともに自分たちも楽しむために、中高生（ヤングアダルト）向けの本を楽しむ会を立ち上げました。活動していくうちに、旧岡崎図書館に足を運ぶ回数が増え。そこで「狭くて暗い図書館」が、「明るくみんなが行きやすい図書館」にならないかなと考えるようになりました。

理想の図書館にするためにと、10年前に『岡崎図書館を考える会』に参加し、本の貸し借り以外の業務について学び、「図書館でできること」をいろいろ実践してきました。

LSC ではどんな活動を…？

代表として全体の事業の統括と、行政と市民をつなぐパイプ役を務めています。会員としては、託児サービスの『りぶらっこふぁみりー』を立ち上げ、りぶらに関わるボランティアの育成とマネジメントをしています。

今後 LSC でやってみたいことは？

いろいろなボランティアを横につなぎつつ、皆さんから企画を立ち上げてもらい、それをまとめるお手伝いをして大きな輪にしていきたいですね。

LSC 以外のボランティア活動は？

『りぶらっこふぁみりー』『学校読み聞かせボランティア交流会』『ブックスタート』など、本と子どもに関わる活動に参加しています。

ボランティア以外に興味のあることは？

調べ学習をやってみました。『岡崎図書館を考える会』から発展した『おかしき図書館倶楽部』の事業で『大人の調べ学習講座』を開催しました。そこで、自分のことについて調べてみました。

自分の旧姓について調べたり、以前住んでいた名古屋の栄について調べていくと、名古屋の歴史や徳川宗春についても調べるようになって、視野も行動範囲も広がりました。

興味を持ったことを調べていくと、自分の知らない新しい発見がどんどんできてとても楽しい。「調べる」というのは、子どもから大人まで楽しめることだと思います。こういう事を大人が進んで楽しんでやっていると、子どもの見本になるのではないのでしょうか。物質的に豊かではなくても、豊かな生活が送れるのではないかと思います。

LSC の活動以外にやってみたいことは？

みんなで一週間に一回くらい集まって、食事しながらお話をしたいですね。できればそこで読み聞かせをしてもらいたい。大人だけでなく、子どもの読み聞かせを聞きたいですね。

Libra  on

プライベートデータ

【行きつけのお店】

『ちいさいうち』（子供の本専門店）
『スパカバナ』（インド料理店）
ナンが大きくてオススメ

【南海の孤島に持っていく本と音楽】

『ミレニウム』（映画『ドラゴンタトゥーの女』原作）今とってもはまっています
『平原綾香』

【宝物】

『孫』男の子3人
（中学3年生・小学6年生・4歳）

【行ってみたい国】

『アフリカ』サバンナにいる自然そのままの動物がいるところ。現地の人が住んでいるところ。カンボジア、ベトナムの市場も大好き。

【自慢できること】

『忘れっぽいこと』困ったことやつらいことなど、すぐに忘れて前向きに次に進んでいくことができるから。
『読み聞かせ』子どもに本を読んであげて、子どもと一緒に楽しめるから。

市民活動団体紹介

楊名時 八段錦太極拳

岡崎市図書館交流プラザのスタジオ1に、癒し系のシルクロードのメロディがゆったりと流れています。40人弱の集団が、ゆるやかな動きでゆっくりと演舞しているのが、中国の長い歴史の中で育まれてきた太極拳です。師範の村松先生を中心に、それぞれの体調や体力に合わせて、無理をせず自分のペースで稽古をしている教室です。

「74才のおばあちゃん先生よ!!」と、笑顔で応えてくれた村松先生が太極拳を始めたきっかけは、17年前にご主人が体調を崩された時に、何か身体によい運動をと、太極拳6ヶ月教室にご夫婦で通い出したのが始まりでした。仕事をしながらの夜の稽古を6ヶ月続け、終了後には、自主講座を立ち上げるくらい好きになっていったそうです。

その後、ご両親の介護で一時中断した時期もありましたが、介護と仕事ばかりではなく自分のために続け、6年前に師範の資格を取りました。今では額田教室を皮切りに、「げんき館教室」「りぶら教室」「なかよし会」と太極拳の輪が広がっています。

村松：師匠である生前の楊先生（楊名時・師家）は「人の悪口は絶対に言うてはいけない、人のよいところだけをみてあげなさい。どんな舞い方でもだめということはない、太極拳は心だよ」とおしゃり、先生の舞う姿は本当に綺麗で心がこもっているものでした。長年太極拳を続けることができたのも、楊先生との思い出や、よい人たちに巡り合えたことが励みになりました。

一人でも多くの方に見学や体験をしていただき、太極拳のよさや健康のありがたさ、仲間づくりをしてもらいたいですね。太極拳は一生ものです。細く長く健康の輪を広げていきたいです。太極拳を通じて仲間ができ、みんなで笑ったり時には励まされたりしながら過ごせる、そんな交流の場があると、家に一人閉じこもる事も少なくなるのではないでしょうか。

代表者：村松 美智子

連絡先：0564-58-3396 / 090-6802-9704

りぶらスタジオ1	火曜日(月4回) 10:00～11:30
げんき館スタジオ	金曜日(月3回) 11:15～12:15
なかよし会(みどり公民館)	土曜日(月3回) 10:00～12:00
額田教室(額田中学校体育館)	木曜日(月4回) 19:30～21:00

そんな村松先生は、時間があればプールで500mを泳ぎ、おいしいものを作って食べ、りぶらサポータークラブの会員としても活動されています。私たちも村松先生のパワーを見習って、もっと外に出て色々なことにチャレンジしていきたいと思いました。

【楊名時太極拳を学ぶ心がまえを示す言葉】

「あせらず」「いばらず」「おこらず」「おこたらず」「くさらず」
※5つの語の頭を綴ると「あいおおく」「愛おおく」になる。

心：心で感じ、心で動き、心から笑顔

息：深く長い呼吸を意識し、副交感神経を活性、気血の流れを促進する。

動：ゆっくり動き、右左の身体のバランスを整え、足腰を鍛える。

※楊名時太極拳は、誰でもが簡単にできる健康増進を目的とする、二十四の型からなる「二十四式太極拳」とも呼ばれています。

